

## 蜂災害の防止対策について (919)

向町署 担当区事務所○金田清治

進藤繁夫

高橋和幸

はじめに

最近の蜂災害の防止にあたっては、その関心が一段と高まる中で、署・現場を挙げて取り組んでいるところであります。しかし、災害は減少傾向にはあるものの、依然あとを絶たない状況にあります。我署でも安全諸会議や現場作業の中から多くの意見が出され、蜂の生息しやすい個所の把握、生息密度の減少、4種類の溶液による誘引器の比較研究をし、その結果をまとめました。又、改良型防蜂網についても現場作業の実態に合わせ改善したのでその結果を発表します。

### 1, 蜂災害の現状

我署の過去7年間の蜂災害の現状は表Iのとおりであります。件数では全体的に減少傾向にありますが、昭和63年度蜂刺され防止対策の強化以来、万一刺された場合は、アレルギー体質者にかぎらず、直ちに管理医へ直行し、手当を受けることなどを、徹底した結果、一時的に公務疾病は昭和63年度に急増したものの、その後現在まで減少して来ています。

事業別では、造林事業が全体の6割を占めています。刺された蜂の種類では、キロスズメバチ(カメバチ)が最も多く、次いでクロスズメバチ(ジバチ)の順になっており合わせて8割近くになっています。刺傷部位別では、顔面(頭部)が全体の半分、上腕部(指含む)が4割強となっています。月別では、8月・9月の地拵最盛期が全体の8割を占めています。刺傷者の休務日数は、そのほとんどが(95%)翌日から作業に従事しています。

### 2, 具体的取組み

#### (1) 誘引器による方法

##### ア、蜂の捕殺(生息数の減少)

6月上旬より10月下旬まで、誘引器38個を下刈及び地拵予定地に設置した。捕殺総数は、624匹で、最も多く捕殺したものは、87匹でした。

表 I 蜂刺されの現状 (昭和59年度～平成2年度 公務疾病のみ)

(1) 蜂災害件数

年度	59	60	61	62	63	元	2	計
件数	2	4	1	5	9	8	5	34

(5) 刺傷部位別

部位	顔面	上腕	腿部	胸部
件数	16	15	2	1
比率	47	44	6	3

(2) 事業別

事業	造林	生産	販売	種苗	その他
件数	20	5	2	2	5

(6) 時間帯別

時間帯	～10時	～12時	～3時	～5時
件数	5	14	6	9

(3) 蜂の種類別

種類	キロス <sup>ニ</sup> ハ <sup>チ</sup>	クロス <sup>メ</sup> ハ <sup>チ</sup>	アジカ <sup>ハ</sup> チ	ヤマトアジカ <sup>ハ</sup> チ	オロス <sup>メ</sup> ハ <sup>チ</sup>
件数	20	7	3	3	1
比率	59	20	9	9	3

(4) 月別

月別	6	7	8	9	10	11
件数	1	4	17	11	0	1

(7) 休業日数

休業日数	1日	2日
件数	32	2

#### イ、生息しやすい場所の把握（誘引器と見廻り，危険箇所の早期把握）

当署では，蜂見廻りを67回実施し，8個の巣を発見することができました。そのほとんどは，キイロスズメバチ（カメバチ）の巣であり，地形別には，沢部3ヶ所・中腹2ヶ所・平坦地3ヶ所（土場跡1ヶ所含む）でありました。

誘引器による捕殺では，1ヶ所当たり，平坦地36匹・沢部21匹・中腹11匹でありました。

また，毎年の現場作業の経験から，生息している箇所別では，下刈はほとんど同じ場所（小さい流域50m～100mの範囲）で営巣している（アシナガバチ）ことから営巣の箇所を把握することにより，翌年の作業時のミーティングなどで注意力を喚起し，未然防止することができます。

地拵箇所では，見廻りも比較的容易にでき，しかもその効果も他の作業比で有効であります。見廻りと誘引器の併用による蜂の生息の把握，捕殺を今後も進めていきたいと思えます。

以上の結果から，発見された営巣は，ほとんどスギ人工林伐採跡地の地拵予定地であり，カメバチの巣が多く，具体的な生息箇所は，伐採跡地では平坦でかつ枝条の堆積している箇所の林縁近く。林内では，立木のかなり高い位置（5～10）の林縁近くにもみられました。作業地以外では夏期に使用していない建物（休憩所，倉庫等）内に営巣する例もみられ，蜂は雨や風など，その年の気象条件に敏感であり，営巣に際して工夫されています。今後，誘引器を設置する箇所は，蜂の種類によってもこととなりますが，下刈予定地では，沢付近の湿地帯・かん木の多い繁みのなか。地拵予定地では，日当たりの良い枝条等の堆積している箇所でどちらも林縁近くにより多く営巣しているようです。

#### ウ、蜂の好む溶液とは（4種類により調査）

蜂の好むと思われる溶液（A液・酒+酢，B液・グレープジュース，C液・ハチミツ，D液・カルピス）を誘引捕殺器に入れ，カメバチの巣の近く（10mくらい）に設置し，比較研究してみました。その結果表Ⅱのように，A液に多くB液，D液，C液という順になりました。この溶液の中に微量の殺虫剤を入れて，蜂が入口から逃げ出さないようにしましたが，殺虫剤の香りが出たためか，香りの強い酢の入ったA液に多く入ったものと

思われます。また誘引器を設置してすぐに（1分ぐらいで）A液に蜂が近づいてきたことも考えて、またB液にも多く入っていたことから、グレープジュースと酢の混合液を作り設置して研究してみたいと思います。（安価であることから）

また、誘引器の溶液が多いときは、入口から逃げ出していくことはありませんでしたが、真夏には溶液が蒸発して、入口から逃げ出したりすることがあったので、誘引器の入口の改良についても考えていきたいと思えます。

表 II 溶液別捕殺数

種 類	酒+酢	グレープ	ハチミツ	カルピス	計
キイロスズメバチ	32	19	2	7	60
クロスズメバチ	7	6	5	5	23
オオスズメバチ	2	1	1	0	4
計	41	26	8	12	87

## (2) 当署における防蜂網の改良

### ア、保安帽から外れるため、止め金で固定

除伐作業等では網が柴や枝・つる等に引っかかり保安帽からはずれることがあるので防蜂網の内側に針金でカギを付け、保安帽のつばにかけて、はずれないようにしました。

### イ、網の裾から蜂が入り、刺されたケースもあったので、裾を体に密着させるために、平ゴムテープを網の裾に取り付け、マジックテープで端を止めるように改良しました。

その結果、従来のひもで体をしばる方法よりも、作業しやすく脱着も容易にできるようになりました。

## おわりに

何よりもまず蜂刺されを防ぐには、現段階では防蜂網の着用が一番効果的であり、そのうえにたって、生息しやすい箇所等の見廻り、誘引器による捕殺等の方法がありますが、広範囲な森林に生息する蜂のほんの一部しか捕殺できず生息密度の低下による効果はあまり期待出来ませんが、現場で働く作業者の蜂の生息に対する予知、注意力の高揚など安全に対する意識が向上してきています。誘引器により、女王蜂を捕殺する事が最大の効果があるので、時期的・溶液等が今後の課題と考えます。

防蜂網についても、現場作業の実態に合わせながら、改良を加え使用してきています。作業中暑苦しい等（着用）の意見もありますが、毎日辛抱強く着用したことにより巣に直面し蜂の攻撃を受けても防蜂網の着用で助けられたことも数々ありました。今後予防対策等について、蜂災害の取り組みで得た、現場の安全意識をたかめ、各事業の安全作業に反映させ、災害の無い明るい職場づくりに頑張っていく考えであります。